

## ВИЗУАЛЬНЫЕ НОВЕЛЛЫ КАК ОДИН ИЗ СПОСОБОВ ИЗУЧЕНИЯ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА

*Статья посвящена визуальным новеллам как способу обучения японскому языку. Комплексное объединение изображения, текста и звука даёт возможность упростить восприятие информации. Визуальные новеллы могут стать помощником в изучении повседневной жизни японцев, истории, особенностей общения. Целью данного исследования является привлечение студентов и преподавателей к использованию визуальных новелл в учебном процессе.*

**Ключевые слова:** визуальная новелла, методика преподавания, видео игры, современные методы обучения.

**T.Omelchenko, Y.Homenko,**  
Institute of Oriental Studies and International Relations “Kharkiv Kollegium”, Kharkiv

## VISUAL NOVELS AS ONE OF THE MEANS OF LEARNING JAPANESE

*The article is devoted to visual novels as one of the means of teaching the Japanese language. Complex combination of images, text and sound provides an opportunity to improve the perception of information. Visual novels can become a guide in the studying of Japanese way of life, history and features of communication. The aim of research is an attempt to engage students and teachers to use visual novels in a studying process.*

**Keywords:** visual novel, means of studying, video games, modern teaching methods.

**Ояма Дайкі**  
Київський національний лінгвістичний університет

### 日本語学習の修正場面における「会話」の協働的達成 ——学習者のふるまいに関するエスノメソドロジー的研究——

日本語学習, 修正場面, エスノメソドロジー, 相互行為分析

#### 1. 問題提起

我々学びの導き手は、授業を実践するとき、例えば教授法などの方法を用いている。と同時に、「授業」を組織するために多様で複雑な「習慣的方法」を用いている。例えば、我々は「扉を開ける」「教壇に立つ」などの日常的ふるまいを、ほとんど習慣的に行っている。むしろ、習慣的に行うことによって授業を「授業」とし

て組織できているとってよい。この「習慣的方法」は、習慣的であるが故に、ふつう考察の対象にはならない。しかし、この「習慣的方法」が正しいという根拠はどこにあるのだろうか。

本論文に即して言えば、我々学びの導き手は、学習者が何か間違った日本語を話したとき、その言語的特徴と間違いの原因、そしてその修正方法に概ね関心を払うだろう。しかし、我々のこのような関心のあり方が正しいという根拠はどこにあるのだろうか。我々は、学習者の話す日本語の正しさとその修正方法に関心を払うあまり、学習者が行っている多様で複雑なふるまいを見落としてしまっているのではないだろうか。

## 2. 構築主義

本論文は、「構築主義」を理論的背景とする。構築主義とは、「知識」を個人の中の存在するものとは考えない(Gergen 1994, 1999)。そのかわりに、(1)にしめすように、「知識」は関係の中で作り成されると考える。

(1) 私たちが「事実である」「合理的である」と考えているもの——知——はすべて、共同体の関係による産物 (Gergen 1999: 266)

## 3. エスノメソドロロジーと相互行為分析

本論文は、「エスノメソドロロジー 《Ethnomethodology》」という研究分野において主に用いられている「相互行為分析」という研究方法を用いる。エスノメソドロロジーの創始者であるハロルド・ガーフィンケル Harold Garfinkel は、Garfinkel (1968)において、エスノメソドロロジーを(2)にしめすように定義している。

(2) エスノメソドロロジーとは社会のメンバーがもつ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識の体系的な研究 (:17)

すなわち、エスノメソドロロジーは我々が現実を「現実」として組織するためにあたりまえに用いている「習慣的方法」を明らかにする研究である。このような研究で用いられている「相互行為分析」は、まさに「相互行為」を分析する。「相互行為」には、発話はもちろん、僅かな言いよどみやコンマ数秒の空隙、視線の動きまでもが含まれる。

(3) いままで単なる「夾雑物」としてみられ、およそ真面目な分析の対象とならなかったようなことがら（言いよどみなどの「ちょっとした手ちがひ」）が、それ自体「社会的意味」のあるものとしてとり上げられる。[.....] 相互行為分析はなによりも、相互行為をとおして、あるいは相互行為としてものごとをみていく1つの見方にほかならない (西阪 1997: 191)

エスノメソドロロジーの視座にたつならば、例えば「行きてきます」のような明らかに間違っていると思われる特徴を備えている発話であっても、具体的な文脈から離れて常に「間違った日本語」として観察可能なわけではない。ある発話が「間違った日本語」として観察可能なのは、相互行為裡にその場の参与者たちが多様で複雑な「習慣的方法」を用いて、ある発話を「間違った日本語」として作り成して

るからである。加えて、「間違っただ日本語を発話する」というふるまいが当該の相互行為裡にどのような意味を持ち得るのかも、実は当該の相互行為が終了したのちに言い得ることであり、事前に明らかだったことではない。当該の相互行為をつぶさに観察することによって、参与者たちが「習慣的方法」を用いながら、ある発話を「間違っただ日本語」として作り成していること、加えて「間違っただ日本語を発話する」というふるまいの意味を協働でその場的に作り成していることがわかる。

## 5. 先行研究と本論文の射程

本論文のような、第二言語の「授業」の「修正場面」についてのエスノメソドロジ的な研究は、管見の限りではあるが決して多くない。例えば、権(2009)は、「修正場面」を母語話者と非母語話者が「相互的かつ協同的に達成している」(:57)ことを明らかにしている。また、細田(2003)は、「授業」ではなく、日常会話においてではあるが、「教授」と「学習」が、会話参与者双方がある理解上及び発話上の問題点に志向して初めて組織され得ることを明らかにしている。

しかし、本論文のような、「授業」における「修正場面」において「学習者が間違っただ発話をする」ふるまいそのものの意味を研究対象としたものは、管見の限りではあるが存在しない。かくして本論文は、ある相互行為を「学習者が間違っただ日本語を発話し、それを教師が修正している」とだけ理解する我々の習慣的な見方を検討することになる。

## 6. 研究資料

本論文は、初級前半レベルの大学1年生を対象とした日本語クラスにおいて、教師と学習者が1対1で約3分間の会話をする場面を、ビデオカメラ1台で記録したものを分析する<sup>1</sup>。会話のテーマは「好きなまつり」であり、会話に先立ち(4)から(6)の質問と会話の時間が伝えられ、学習者には答えを考える時間が与えられた。

- (4) 好きなまつりは何ですか。
- (5) それは、どんなまつりですか。
- (6) そのまつりをどう思いますか。

## 7. 分析

以下に示す事例(7)は、A(教師)がB(学習者)に(4)を質問し、Bが「しんねんです」と答え、Aが「しんねん」と応答したあとからから始まる。一見すると、Bは間違っただ「1月1日」の「1日」を「ついたち」ではなく「いちにち」と発話しているようにみえる。けれども、つづくBのふるまいから、Bがじつは間違っただと分かっているが、それでも、「いちにち」と発話していることがわかる。

議論をすすめるにあたり、参与者たちが組織している相互行為——発話、視線の向き、身体的ふるまいなど——を詳細に書きおこしたトランスクリプションを用いる。作成にあたっては、鈴木(2007)、西阪(1997)、好井他(1999)を参考にした<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 2012年12月14日撮影。学生の数は16名であった。学習者には、事前に研究目的であることを伝え、許可をとってうえで撮影を行った。

<sup>2</sup> 以下、トランスクリプションの記号の見方を示す。

[ ] 発話の重なり (数字) 秒数分の空隙 (.) 0.2秒以下の空隙 hh 呼吸音  
::: 発話の伸ばし ? 語尾の音の上昇 ° ° 小さい音 大きい音

01a B: え::(:)°んん°(:)しんねんは:(0.4)え::°え°(:)じゅ(:)え(:)じゅうにが

A<sup>(a)</sup>  
 《 両手をAの肩の高さまでゆっくり上げて、素早く下ろす 》

B  
 《 両手を合わせて口の前 《 両手を胸の前で合わせたあと、下に降ろす 》 》

01b つ↑(:)え::(:)え(:)さん(:)え:(:)さんじゅういち(:)え:(:)にち(:)え(:)

A<sup>(a)</sup>  
 《 軽く頷く 》 《 軽く頷く 》  
 (下) ← 左前方 (目を閉じる) → 下 → A → 下  
 《 僅かに頭を上下させる 》 《 右手の人差し指と中指で空中に「じ」を描く 》

B

01c から(0.2)°ん°(1.0)いちがつ(0.6)え:: (0.6)いちがつ:(0.4)°い::°

A

B

02 (3.0)

A

B

03 A: hhhhhhhh

07 A: ついたちです

04 B: hhhhhhhh

A

B

B

05 (0.8)

08 A: hh hhhhhhhhhhhhhhhhh

A

09 B: つひいたち

A

B

B

06 B: いちにち

10 A: そうです

A

A

B

B

注目するのは、01行目から10行目におけるAとBのふるまいである。01c行目において、Bは下を向きながら「いちがつ」と発話し、0.6秒の空隙ののち、そのまま尚、発話の下の実線は視線が固定していること、破線は視線が動いていること、文字はその視線が向けられている対象を示す。太い斜線は、二重山括弧「《 》」で記述された身体的ふるまいを行っていることを示している。

「え:」と発話する。そして、0.6秒の空隙ののち、目を閉じ、右手の人指し指を立て、左手で顔左半分を押さえるようにして、いわゆる考えている姿勢をとりながら「いつがっ」を、今度は語尾を少し伸ばしながら発話する。次に、0.4秒の空隙ののち、人指し指を立てた右手を上下に揺らしながら、小さい声で長く伸ばして「い:」と発話する。AはこのBのふるまいに反応するように、左手の人指し指を立てる(02行目)。BはこのAのふるまいに反応するように、目を開け、視線をAの左手の人指し指に向ける。すると、Aは左手を、Bは右手を同時に上下に数度揺らし始める。そののち、Aは両手を開き、まるでBの発話を促すように、両手の手首を胸の前で円を描くように回す。Bも右手を開いて上下に揺らし、左手を下ろしたあと、今度は開いた右手で顔を覆う。そして、AとBは同時に笑い出し、同時にやめる(03-04行目)。0.8秒の空隙ののち(05行目)、Bは視線を下から左の壁にいったん移動させ、そしてAの顔に視線を向けながら「いちにち」と発話するが、発話の途中から視線を、上体を持ち上げながら動くAの手に一瞬移動させ、再びAの顔の向ける(06行目)。そして、Aが手のひらを上に向け両手を前に出しながら「ついたちです」と発話するふるまいに同調するように、Bも手のひらを上に向け両手を前に出す(07行目)。この同調したふるまいに反応するように、Aは大きく笑い(08行目)、Bは上体を後ろにそらして笑いながら「ついたち」と発話する(09行目)。10行目において、AはBの「ついたち」の発話に答えるように、「そうです」と発話しながら、机の上に置かれたプリントに視線を向ける。BもAと同時に、Aから机の上に置かれたプリントに視線を向ける。

このようなAとBのふるまいから、次の3つのことが言い得る。第一に、これは既に先行研究でも指摘されていることであるが、AとBはお互いの発話やふるまいなどをリソースとして用いながら、自らの発話やふるまいをその場的に調整し、当該の相互行為を組織していることが観察可能である。すなわち、AとBは協働的にBの「いちにち」(06行目)という発話を「間違った日本語」として作り成していると言い得る。

第二に、06行目と07行目のBのふるまいから、Bは、AがBの「いちにち」という発話を修正するであろうことがわかりながらも、「いちにち」と発話していることが観察可能である。すなわち、BはAの07行目の発話を促し、この場の学びを作り成していると言い得る。

第三に、AとBはBの「いちにち」(05行目)という発話を含む一連の発話やふるまいをリソースとして、当該の相互行為を「修正場面」として組織し、「1月1日」についてのやりとりを終了していることが観察可能である。すなわち、ある相互行為を「修正場面」として適切に組織することによって、会話を進めることを達成していると言い得る。

## 8. 結論

本論文は、ある相互行為を「学習者が間違った日本語を発話し、それを教師が修正している」とだけ理解する我々の習慣的な見方の妥当性に疑問を抱き、構築主義の視点から、相互行為裡に学習者があたりまえにもちいている「習慣的方法」を記述するエスノメソドロジー的な研究であった。

具体的に、日本語クラスにおいて「学習者が間違った日本語を発話し、それを教師が修正している」と観察可能な場面の相互行為分析を試みた。その結果、学習者はそれが間違いであり、故に教師から修正されると分かっているながらも、その間違

った発話をしていること、加えて、参与者たちはその発話をリソースとして用いることによって、当該の相互行為を組織し、会話を進めることを達成していることが明らかになった。

もちろん、本論文が示したのはほんの一例に過ぎない。しかし、このような学びの場の一つでも存在する限り、我々の「あたりまえ」に無批判でいることは学習者たちが学びの場で実際におこなっている多くのことを見過ごしてしまうばかりか、学習者たちの学びを作り成す営みを歪めてしまうのではないだろうか。

本論文のような、第二言語の「授業」についてのエスノメソドロジータ的な研究は、管見の限りではあるが決して多くない。すなわち、我々学びの導き手も含めた授業の参与者たちが、どのような「習慣的方法」を用いて授業を「授業」として組織し、結果として「知識」を作り成すに至るのかについて、ほとんど明らかになっていないといつてよい。加えて、我々学びの導き手は、我々の「習慣的方法」を「あたりまえ」のものとして概ね省みることがない。けれども、我々が組織している相互行為の多様さと複雑さは我々の想像を遥かに超えており、本論文が分析の対象とした「修正場面」だけで捉えきれぬものでは決してない。第二言語の「授業」におけるさまざまな相互行為を、様々な視点から分析していく必要があるだろう。今後の課題としたい。

#### 参考文献

- (1) 串田秀也・好井裕明 編 (2010) 『エスノメソドロジータを学ぶ人のために』世界思想社。
- (2) 権賢貞 (2009) 「日本語非母語話者は学習モデルの逸脱者なのか——日本語教育と第二言語習得研究における調整過程の再考——」 『筑波応用言語学研究』第16号, 45-59.
- (3) 鈴木聡志 (2007) 『会話分析・ディスコース分析: ことばの織りなす世界を読み解く』新曜社。
- (4) 西阪仰 (1997) 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』金子書房。
- (5) 細田由利 (2003) 「非母語話者と母語話者の日常コミュニケーションにおける言語学習の成立」 『社会言語科学』第6巻(1), 89-98.
- (6) 好井裕明・山田富秋・西坂仰 編 (1999) 『会話分析への招待』世界思想社。
- (7) Garfinkel, Harold (1968) 「エスノメソドロジータ命名の由来」 『エスノメソドロジータ——社会学的思考の解体』 [山田富秋・好井裕明・山崎敬一 編] せりか書房, 9-18, 1987.
- (8) Gergen, Kenneth J. (1994) 『社会構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる——』 [永田素彦・深尾誠 訳] ナカニシヤ出版, 2004.
- (9) Gergen, Kenneth J. (1999) 『あなたへの社会構成主義』 [東村知子 訳] ナカニシヤ出版, 2004.